

2 めまい

症例 1

●患者：女性，26歳，工具／●診察日時：2001年2月28日

若い女性が人に支えられながら診察室に入ってくる。顔色淡白で、元気がなく、歩き方がゆっくりとしている。

医師：どうしましたか？

患者：めまいがします。

医師：めまいがするようになってから、どのくらい経ちますか？

患者：3カ月くらいです。



めまいは臨床でよくみられる症状である。その原因はさまざまで、証候も虚実ともにあり、しかも場合によっては危険な疾病の前兆の可能性もあるので、慎重に診断しなければならない。この患者は症状が現れてから比較的長い時間が経っており、望診から判断しても、虚証もしくは虚実夾雑の可能性が高い。

医師：その3カ月の間、病院へ行って検査や治療をしなかったのですか？

患者：行きました。元旦の前に仕事中にめまいで倒れたので、病院に運ばれてそのまま入院しました。そのときにいろいろな検査をしましたが、医者は再生不良性貧血だといいました。当時、ヘモグロビンの数値がとても低くて、何度か輸血もしました。退院後も毎日ホルモン治療をして、医者は治療には3カ月から半年はかかるだろういいました。今は自宅療養中ですが、いつもめまいがしているので、精神的にもすぐれません。それで、友達が中薬で体調を整えてみてはどうかと勧めてくれたのです。



患者は突然再生不良性貧血を患った。それには必ず何か原因があるはずである。その辺りを詳しく尋ね、全面的に弁証を進めなければならない。

医師：以前、何か大きな病気をしたことがありますか？

患者：ありません。ただ、体質的に弱くて、よくカゼを引きます。



患者はもともと正気不足でカゼを引きやすい。これは今回の発病と大きな関係があるはずである。

医師：何か毒性のあるものと接触したことはありませんか？

患者：あります。私は化学工業の工員なのですが、医者は、私が仕事中にベンゼン系の化学物質に触れたことが今回の発病の原因ではないかといっていました。本当に、自分がふだんからしっかり注意していなかったのがいけないのです。



患者は長期にわたり有毒物質と接触しており、それに加え、体質的に弱かったこともあり、毒が少しずつ身体を侵し、同時に正気が損傷して発病にいたった。したがって、このめまいは虚損が主であると考えられるが、虚実夾雑の可能性もまだ完全には捨て切れない。

医師：めまいはずっと持続して起きているのですか？ それとも断続的に起こるのですか？

患者：断続的に起きます。でも、1日に何度も起きます。

医師：ふだん、どういった場合にめまいがするのですか？

患者：毎朝、起きたときには必ずめまいがします。ベッドに横になっていれば何ともないのですが、起き上がるともう天井がグルグル回ってしまいます。しばらくじっと座っていないと動き出せません。ふだんは、家にいてもほとんど何もできません。ちょっと歩いただけでクラクラするし、でも、横になってしまうと、また起き上がったときにめまいがするので、怖くて横になる

こともできません。ですから、昼間はほとんど机に寄りかかって座っているだけです。今はもう一人では怖くて外に出かけられません。診察でさえ勇気を奮い起こして、家族に付き添ってもらってやっと来られるくらいです。さっきも診察を待っている間、結構長く座っていたのですが、まだ少しクラクラしています。

医師：では、舌を出して見せてください。

[舌診] 舌質淡・舌周囲に歯痕・舌苔白でやや膩

(同時に脈を診る)

[脈診] 脈沈細で無力



めまいがして、動くとともに悪化することや、舌と脈の状態を合わせて考えると、気血虧虚と関係がある可能性が高い。舌周囲に歯痕があるのは、病位が脾にあることを示しているが、その他の臓腑にも虚損があるかどうか、さらに詳しく資料を集め、明確に弁証しなければならない。

医師：発作のときは、めまいだけですか？他に何か具合の悪いところがありますか？

患者：あとは胸が苦しく、心臓がドキドキします。何か空気がうまく入っていない感じです。朝起きたときは、よくめまいと一緒に吐き気がして、吐けば少し楽になります。

医師：どんなものを吐くのですか？

患者：吐くのはみんな水のようなものばかりで、他には何も出てきません。



めまいに心悸・胸悶*・悪心・嘔吐を伴うのは、気血不足から心が失養し、胸部の陽気がスムーズに流れなくなり、さらに胃失和降*になることと関係がある。

医師：熱が出たり、さむけがすることはありますか？

患者：それはないです。入院中は少し熱が出たこともありましたが、点滴で抑えてからは出なくなりました。ふだんからカゼを引かないようにとても気を

つけています。



陰虚および陽虚の可能性はない。

医師：食欲はありますか？

患者：こんな体調ではまったく食欲がありません。お腹もいつも張っていて、何も食べたくありません。でも、医者から栄養をつけるようにいわれているので、家族も少しでもいいから食べなさいというのですが、少しでも多く食べるとすぐ吐いてしまうので、少しずつ何回にも分けて食べるようにしています。



腹脹・納少*で、多く食べると吐いてしまうというのは、脾胃の虚損・納運機能の失調と関係がある。

医師：そうですね。その食事の仕方は非常によいと思います。便と尿はどうですか？

患者：尿は普通ですが、便はいつも形になりません。それに、いつもトイレの後にスッキリした感じがありません。あとは食事が済むとすぐトイレに行きたくなります。



大便稀溏*は、脾虚によって運化*機能が失調したり、水湿が下焦に流れ込んでいることと関係がある。中虚により気滞が現れているため、排便後もスッキリしない。

医師：ふだん、汗はよくかきますか？

患者：めまいがするときは汗が出ます。でも、座っているだけなら出ません。

医師：夜はよく眠れますか？寝汗はかきませんか？

患者：あまりよく眠れません。なかなか寝つけなくて、眠っても夢ばかり見ます。寝汗は特にかきません。



患者は自汗*の傾向があり, 動くとき悪化する。気虚によって肌表が固摂*できなくなっていると考えられる。

医師: めまいがするとき, 耳鳴りはしますか? ふだん, 腰痛はありませんか?

患者: それはありません。



腎虚の主症はみられない。

医師: どこか出血したところはないですか? 例えば皮膚に出血点(瘀斑)があるとか。

患者: それもありません。入院中に医者から気をつけるようにいわれましたので。



脾虚になると統血*機能が低下することがあり, 肌衄*などが現れることがある。また, 肌衄は再生不良性貧血の患者によくみられる症状でもある。

医師: 生理は順調ですか?

患者: ここ数カ月は量が以前よりも少なくなったと思います。色も以前より薄くなった気がします。今回はすでに前回から1カ月以上経っているのですが, まだ来ていません。



月経の量が少なく, 色も薄く, 周期も安定しないのは, 血虚によって衝任不足になったことと関係がある。

望・聞・問・切の四診の結果を合わせて得られた病状記録・証名および診断結果は, 以下のとおりである。

【カルテ】

主訴: 頭暈・力が入らない症状が3カ月余り。納少・便溏*を伴う。

現病歴: 患者は長期にわたり有害物質と接触しており, もともと虚弱体質でカゼを引きやすいこともあり, 毒が少しずつ身体の中に入り込んで正気を傷つけ, めまいを起こすようになり, 重症のときは失神するようになった。2カ月前に入院し, 各種検査および治療を行ったが, 症状の改善はあまりみられない。

所見: めまいの発作が頻繁に起こり, 常に身体に疲労感がある。心悸・胸悶・吐き気・水状のものを吐く・自汗などの症状を伴い, 動くとき諸症状が悪化する。顔色淡白・不眠・多夢・腹脹・納少・多く食べれば吐いてしまう・大便稀溏・排便後もスッキリしない・生理不順・月経量が少なく色も薄い・舌質淡・舌周囲に歯痕・舌苔薄白・脈沈細で無力。

【証名】 心脾両虚証

【治法】 養血益気・健脾化濁・補心安神

【処方】 補中益気湯合帰脾湯加減

【参考処方】

補中益気湯(『脾胃論]): 人参・黄耆・白朮・甘草・当帰・陳皮・升麻・柴胡
帰脾湯(『濟生方]): 党参・黄耆・白朮・茯苓・酸棗仁・竜眼肉・木香・炙甘草・当帰・遠志・生姜・大棗

【弁証分析】

患者は長期にわたり有害物質と接触しており, もともと虚弱体質でカゼを引きやすいこともあり, 毒が少しずつ身体の中に入り込んで正気を傷つけ, 徐々に気血虧損になっていった。気虚になると清陽*の循環が悪くなり, 血虚になると脳が失養するため, めまいがときどき起こり, 疲労感・力が入らない状態となり, ひどいときには失神してしまう。輸血などの治療をしても根本的な治療がされてないので, 病状が改善されない。気虚によって固摂機能が低下し, 胸部の陽気がスムーズに流れなくなり, また血虚によって心が失養するため, 自汗・胸悶・心悸が起こる。中虚による気滞から, 濁邪が上部に氾濫し, 胃失和降となるため, 悪心・嘔吐が現れる。「労すれば気を消耗する」ので, 動くとき各症状が悪化する。脾は運化を主り, 胃は受納*を主り, 脾胃は気血生化の

源である。脾気が虚弱になると、胃失和降・納運機能の失調・水穀不化*となるので、腹脹・納少・多く食べれば吐いてしまう・大便稀溏の症状が現れる。気虚によって推動力が衰えるため、排便後もスッキリしない。気血不足によって心神が失養するため、不眠・多夢になる。衝脈は「血海」であり、気血虧虚になると、衝任が不足し、血海が正しい時期に充たされなくなるため、生理不順になり、月経の量が少なく色も薄くなる。顔色淡白・舌質淡・舌周囲に齒痕・舌苔白膩・脈沈細で無力は、すべて血虚による気血不榮の象である。四診の結果を合わせて考えてみると、心脾気血虚証の症候の特徴と一致する。よってこの診断を下す。

症例2

●患者：男性，52歳，幹部／●診察日時：2003年3月30日

中年男性が家族に付き添われて診察室に入ってくる。顔色がやや赤く，両目も少し赤くなっている。

医師：どうしましたか？

患者：ずっと高血圧で，この1週間は特に具合が悪いのです。医者にいわれたとおり降圧剤の量を増やしているのですが，効果があまりなくて，とにかくめまいがひどいです。



めまいは高血圧患者によくみられる症状である。患者は目も顔も赤いことから，肝陽上亢の証である可能性が高い。しかし，その他の病状の資料が完全に揃っていない段階では，結論を出すのはまだ早すぎる。

医師：では，まず血圧を測ってみましょう。今日は降圧剤を飲みましたか？

[血圧] 160/100mmHg

患者：飲みました。降圧剤を飲み始めて，もう15年になりますが，毎年この時期になると，血圧が安定しなくなるのです。血圧が上がるとめまいがする

ものですから，中薬を飲んで調整するようにしています。



春は肝気が昇発する季節であり，さらに患者は体質的に陽盛または陰虚陽亢*の傾向があるため，自然界の陽気が盛んになることに感応し，体内の陽気も増加し，肝気と肝火が上部につき上がって発病したと考えられる。

医師：めまいの他に，何か頭部で具合の悪い所はありますか？

患者：少し頭全体が張ったように痛みます。視力も落ちてますし，あと，めまいがするとき，耳鳴りもします。

医師：耳鳴りの音は大きいですか？



耳鳴りは原因が異なればその症状も変わってくる。蟬の声のように細かい音であれば，多くは腎精不足または脾虚などの虚証から起こるものである。波のように大きな音であれば，肝胆火旺・肝陽上亢・痰火上擾など，実証もしくは本虚標実証である可能性が高い。

患者：すごく大きな音がします。



頭暈・頭部の脹痛・耳鳴り(波のような大きな音)・視力の低下・目や顔が赤いなどの症状から，肝陽上亢・肝胆火旺・痰火上擾と関係があると考えられる。ただし，肝陽上亢は本虚標実証であり，後の2つは実証なので，さらに慎重に鑑別しなければならない。

医師：では，舌を出して見せてください。

(同時に脈を診る)

[舌診] 舌質やや紅・舌苔薄黄やや少

[脈診] 脈弦細・尺脈が特に頭著



舌と脈の状態および前述の各症状を合わせて考えると、陰虚陽亢である可能性が高い。ただし、さらに多くの資料を集めて正確な弁証をしなければならない。

医師：めまいはどんなときにひどくなりますか？

患者：主には機嫌が悪くなったときです。私もこの病気は怒ってはいけないことはわかっているのです。でも、もともと性格がせっかちで怒りっぽく、自分でもなかなか抑えきれないのです。それに、最近、息子が付き合っている相手のことで不満があるものですから、特にすぐイライラして爆発してしまうのです。



患者は急躁*・易怒*であることから、肝気・肝火が亢進して肝陽上亢となり、めまいがひどくなった。

医師：夜はよく眠れますか？

患者：あまりよく眠れません。ちょっと音がしただけでも、すぐ眠れなくなります。眠れなくなると、まためまいがひどくなりますし、それにやたらと夢を見ます。



肝陽上亢は陽亢が標で、陰虚が本であり、その病理の基礎は肝腎陰虚である。陽亢から心神をかき乱し、心神が不安定となり、心煩*・不眠・多夢が起こる。ここでは関連する症状の有無を尋ねなければならない。

医師：昼間、仕事のとき、具合はいかがですか？

患者：今は休んで家にいます。一日中めまいがして、まったく仕事にならないものですから。それにもの忘れもひどく、ちょっと長めに歩くと、まためまいがひどくなるものですから、道端で倒れたりしたらたいへんなので、怖くてなかなか外にも出られません。

医師：歩いているときはどのような感じがしますか？

患者：歩いているときは何だか綿の上でも歩いているような感じです。頭が重

くて、足は妙に軽いのです。ちょっとでも長く歩くと、すぐ足に力が入らなくなります。それに、ふだんから腰痛もひどくて、一昨日の晩も散歩に出たのですが、30分ほどしか歩いていないのに、帰り道は足がだるくて、腰は痛くて、家に上がるときもめまいがして、もう少しで転ぶところでした。家に入ったらずぐにベッドに横になりました。体力も以前に比べると驚くほど衰えました。



腰膝酸軟*・頭が重く足が軽い・歩くときにフワフワとした感覚がある、これらは肝陽上亢・肝腎陰虚・上盛下虚〔上焦が実し下焦が虚している〕と関係がある。

医師：食欲はいかがですか？

患者：このところあまりありません。それに、やたらとげっぷが出るようになりました。



げっぷは虚実ともに現れる症状である。虚証では、胃気虚などがあり、一般に病程が長く、げっぷの音は低く沈んでいる。実証では、病程が短く、げっぷの音も大きい。主には胃に未消化の食べものが滞っていたり、肝気が胃を犯していることなどが考えられる。この患者の病程は短い、その他にも音などについてさらに詳しく尋ねなければならない。

医師：げっぷが出るとき何か臭いがしますか？ げっぷの音は大きいですか？

患者：特に臭いはありませんが、音は大きいです。

医師：げっぷが出るのは食事と関係がありますか？

患者：それはありません。お腹が空いているときでも出ます。特に怒ったときにはよく出ます。



げっぷは病程が短く、音が大きく、特に臭いもない場合は、情緒との関係が深い。このことから肝気が胃を犯しているものであると考えられる。肝の疏泄機能が失調し、肝気が横逆して胃を犯し、胃気が上逆するため、食欲が低下し、げっぷがよく出るようになる。

医師：のどはよく渇きますか？

患者：渇きます。特に、夜に水が飲みたくなります。あ、それと寝汗もよくかきます。



口渇・咽乾で夜間に特にその傾向が強い、盗汗*、これらは肝腎陰虚によって陰が陽を制御できなくなり、虚熱*が津液を外に追い出して、身体が失養するために起こる。

医師：便と尿の調子はいかがですか？

患者：尿は正常です。便は便秘気味で2日に1回くらいです。

医師：なるべく野菜や果物をたくさん食べるようにしてください。便秘をよくしておかないと、血圧にも影響が出ます。

患者：わかりました。



大便乾結*は肝腎陰虚により虚火*が津液を焼き、腸道が潤わなくなったことと関係がある。便秘で排便困難になると、陽が亢進して内風を引き起こしやすいので、患者には便秘をよくするように指導しなければならぬ。

望・聞・問・切の四診の結果を合わせて得られた病状記録・証名および診断結果は、以下のとおりである。

【カルテ】

主訴：めまいの発作が繰り返し現れるようになって15年。この1週間で悪化。

現病歴：患者は長年にわたり高血圧症を患っており、15年間、降圧剤を飲み続けている。毎年春になると、めまいの発作がよく起こる。また最近、家でもめごとがあり、症状がさらに悪化した。

所見：めまい・頭部の脹痛・目のかすみ・耳鳴り（波のような音）。さらに急躁・易怒・顔色や目が赤い・心煩・不眠・健忘・多夢・精神的な疲労・少し動きすぎると腰膝酸軟になる・頭が重く足が軽い・歩くときに足元がフワフワした感じがする・食欲低下・げっぷが頻繁に出る・口が乾き水を飲みたがる・大便乾結などの症状を伴う。舌質やや紅・舌苔薄黄やや少・脈弦細・尺脈が特に顕著。

【証名】 肝陽上亢証

【治法】 平肝潜陽・滋養肝腎・疏肝理気

【処方】 天麻鉤藤飲・当帰竜薈丸合柴胡疏肝散加減

【参考処方】

天麻鉤藤飲（『雑病診治新義』）：天麻・鉤藤・生石決明・川牛膝・桑寄生・杜仲・山梔子・黄芩・益母草・朱茯神・夜交藤

当帰竜薈丸（『宣明論方』）：当帰・竜胆草・山梔子・黄連・黄芩・黄柏・大黄・青黛・芦薈・木香・麝香

柴胡疏肝散（『景岳全書』）：柴胡・芍薬・枳殻・陳皮・炙甘草・川芎・香附子

【弁証分析】

肝陽上亢は本虚標実の証であり、その本虚は肝腎陰虚で、標実肝陽亢盛である。春は肝気昇発の季節であり、さらに患者はもともと肝腎陰虚の体質のため、肝陽が亢進しやすい。それに加え、家庭でのめごとで心煩・易怒となり、肝気・肝陽が過度に昇発し、血が氣に従い逆上して清空*をかき乱すため、めまい・頭部の脹痛・目のかすみ・耳鳴り（波のような音）が起こった。陽亢になると気血が上部に壅滞するため、顔色や目が赤くなる。陽亢から心神*がかき乱されて神が自分の居場所である心を守れなくなるため、心煩・不眠・健忘・多夢が現れる。陽亢になると肝魂*を擾動し肝気が旺盛になるため、急躁・易怒の症状が現れる。肝腎の陰虚は主に下部の陰虚であり、さらに病程も長いいため、筋骨が失養して、精神的な疲労・腰膝酸軟が現れる。上盛下虚のため、頭が重く、足が軽く感じ、歩くときも足元が浮いたような感じがする。肝の疏

泄機能が失調して肝気が胃を犯すようになるため、食欲が低下し、げっぷが頻繁に出るようになる。口が乾き水を飲みたがる・大便乾結・舌質やや紅・舌苔薄黄やや少・脈弦細は、すべて陰虚陽亢の象である。尺脈の沈細の脈象が特に顕著なのは、肝腎陰虚の表れである。四診の結果を総合的に考えると、肝陽上亢証の症候の特徴に符合する。よってこの診断を下す。

症例3

●患者：女性，42歳，教師／●診察日時：2002年9月17日

中年女性が診察室に入ってくる。足取りはゆっくりとしており、体型はやや太り気味、顔色は暗く、目にも力がない。

医師：どうしましたか？

患者：昨日、また、めまいがしまして。

医師：最初にめまいがするようになったのは、いつ頃ですか？

(同時に患者のカルテを見る。3年前に別の病院でメニエール病と診断されている)

患者：3年前です。

医師：この3年間、よくめまいの発作が起こるのですか？

患者：はい。それに、ただめまいがするだけならまだいいのですが、まったく前兆がないのです。昨日は、職場で昼休みが終わって仕事にかかるうとしたとき、突然、めまいが起こりました。

医師：これまでどのような治療をしてきましたか？ 中薬を飲んだことはありますか？

患者：中薬を飲んだことはありません。ふだんは鎮静剤とベタヒスチンを飲んでいるのですが、最近、発作の回数が以前より多くなり、いつも、また起こるのではないかとビクビクしています。中医は根本から治療すると人から聞いたものですから、ぜひ試してみたいと思ってやって来ました。

医師：発作のときの様子を詳しく話していただけますか？

患者：そのとき、私は事務机に伏せて昼寝をしていました。起きて顔を洗いにしようとしたとき、急に目の前が真っ暗になって、天井がグルグル回り始めたのです。雷のような音の耳鳴りもして、他の音は何も聞こえなくなって、吐き気がしました。それで、自分でもまた発作が起きたのだと思い、急いで机につかまって椅子に座って、目を閉じてじっとしていたのです。でも、結局我慢できなくなって、昼に食べたものを全部吐いてしまい、その後さらにめまいがひどくなってしまいました。そのときは幸いにも同僚が事務所にいたので、私をソファに寝かせてくれて、30分くらい横になって、薬を飲んでからは、少しはよくなりました。でも、めまいは完全にはよくなって、ちょっとでも動くと、周りのものが回り始めてしまうのです。結局、家の者に迎えに来てもらって帰宅しました。



めまいの原因はさまざまであり、病機も虚実ともに存在する。さらに随伴する症状などを詳しく尋ね、証の虚実や邪気の性質を明確にしなければならぬ。

医師：今の気分はいかがですか？

患者：まだ、あまりよくありません。毎回、発作の後は、だいたい1週間くらい経たないと完全にはよらないのです。

医師：どのように具合が悪いのですか？

患者：今もまだめまいがします。それにすごく頭が重いです。何かでグルグル巻きにされているような感じです。身体も重いです。足に鉛か何かをつけているようで、歩くのもやっとなです。ちょっと動いただけで、目はかすむし、胸は苦しくなるし、吐き気もしてきます。あと、しょっちゅう耳鳴りがして、耳も昔より聞こえにくくなったような気がします。



めまい・目のかすみ・耳鳴り・難聴・頭が何かで包まれているように重い・身体や四肢が重く感じる・胸悶・悪心、これらの症状は痰濁が中焦で阻滞し、清陽が上昇しなくなり、気機がスムーズに流れなくなったことと関係がある。

医師：では、舌を出して見せてください。

(同時に脈を診る)

【舌診】舌質淡紅・舌苔白膩

【脈診】脈濡滑



舌と脈の状態を合わせて考えると、痰濁が中焦で阻滞して起こっている可能性が高い。

医師：食欲はいかがですか？

患者：昨日から今日にかけてほとんど何も食べていません。食べたくないのです。(胃の辺りを指して) ずっとこの辺がグルグルしている感じがします。



痰濁が阻滞することによって脾陽が不振になっているのであろう。

医師：のどはよく渴きますか？

患者：いいえ。



痰濁が盛んで津液の損傷はみられない。

医師：便と尿はいかがですか？

患者：それは特に異常はありません。

医師：夜はよく眠れますか？

患者：一日中眠たいです。だるくて元気が出ません。



身体がだるく眠気が取れないのは、痰湿が盛んなことから清陽が上昇しなくなったことと関係がある。

医師：ふだん、のどに痰が絡むようなことはありませんか？

患者：あります。特に朝起きたときに多く出ます。

医師：どんな色の痰ですか？ 薄いですか、それとも濃い痰ですか？

患者：白い痰です。どちらかといえば濃いと思います。



患者はもともと痰濁が盛んな体質のようである。これは本症の発作と関係が深いはずである。

医師：生理は順調ですか？

患者：生理は大丈夫です。でも、おりものは多いほうです。

医師：おりものの色はどうですか？ 質は薄いですか、濃いですか？

患者：白くて濃いです。



痰濁が盛んで、湿濁が下焦へも流れ込むため白くて濃い帯下が多くなる。これは痰濁内盛の症候と一致する。

望・聞・問・切の四診の結果を合わせて得られた病状記録・証名および診断結果は、以下のとおりである。

【カルテ】

主訴：めまいや耳鳴りの発作を繰り返すようになって3年。悪化して2日。

現病歴：患者はこの3年、特にはっきりとした誘因もなく、突発的なめまいの発作が起こることが多い。発作のときには、回転性めまいに、波のような音の耳鳴り・悪心・嘔吐などを伴い、休息をとり鎮静剤などを服用すると症状は治まる。昨日、また発作が起こったため来院。

所見：めまい(船や車に酔ったよう)・目のかすみ・耳鳴り・難聴などの症状が現れ、加えて、胸悶・上腹部のつかえ・吐き気・頭や身体が重い・顔色が暗い・疲労感・力が入らない・眠気が取れない・食欲低下・朝起きたときに痰が多い(色は白く粘り気がある)・白く濃い帯下が多いなどの症状を伴う。舌質淡紅・舌苔白膩・脈濡滑。

【証名】痰濁中阻証

【治法】燥湿祛痰・健脾和胃

【処方】半夏白朮天麻湯加減

【参考処方】

半夏白朮天麻湯（『医学心悟』）：半夏・白朮・天麻・陳皮・茯苓・炙甘草・生姜・大棗

【弁証分析】

患者はもともと痰湿内盛の体質であり、そのため痰濁が阻滞することによって清陽が上昇せず、濁陰*が降りなくなり、目のかすみ・波のような音の耳鳴り・周りのものが回って見える・悪心・嘔吐などの症状を伴う、激しいめまいの発作が起こるようになった。痰濁が体内に滞ることによって、胸部の陽気がスムーズに流れなくなり、心神の働きが鈍くなり、胃失和降となるため、胸悶・上腹部のつかえ・吐き気・食欲低下・身体がだるく眠気が取れないなどの症状が現れる。痰濁が阻滞することによって、脾陽の流れが悪くなり、運化機能が衰え、全身に精微物質を行き渡らせることができなくなり、さらに痰濁が経絡にも入り込んで、経気が不利となるため、頭や身体が重く感じ、顔色が暗く、疲労感・力が入らなくなるという症状が現れる。痰濁が盛んで、湿濁が下焦へも流れ込むため、白く粘り気のある帯下が多くなる。もともと痰盛の体質のため、朝起きたときの痰が多い（痰の色は白く粘り気がある）。舌質淡紅・舌苔白膩・脈濡滑というのはすべて痰濁中阻の象である。四診の結果を総合して考えると、痰濁中阻証の症候の特徴に符合する。よってこの診断を下す。

【解説】

気をつけなければならないことは、本証が長引くと、痰が気機を阻害し、鬱した痰が火と化し、痰火が清竅*をかき乱すため、めまい・頭部の脹痛・心煩・口苦・のどは渇くが水を飲みたがらない・舌苔黄膩・脈弦滑などの症状が現れる。この場合は、苦寒燥湿の薬を用いて、熱を取り去り痰を溶かさなければならない。もし、陽虚の体質で、邪気が寒化して、痰飲が内部に滞り、清竅を犯した場合には、めまいに、畏寒*・四肢の冷え・舌苔白滑・脈弦または滑などの症候を伴う。治療には温陽化湿の薬を用いて寒飲を温めて溶かす。

まとめ

めまいとは、頭部が重く感じ、見るものがかすんだり、回っているように見え、軽い場合は、少し目を閉じていれば治るが、少し重い場合は、何か乗りものに乗っているような感じがし、さらに重症になると、天と地が両方とも回っているように感じ、立っていられなくなる。一般には、悪心・嘔吐・冷や汗などを伴い、ひどいときには失神する場合もある。本症は耳鳴りや聴力の低下を併発することもあり、どちらが主症状であるかを明確にしなければならない。めまいの原因は数多いため、患者の症候の特徴などにもとづいて、証の虚実・病位などを明確にして判断しなければならない。

本症の多くは、情緒の変化・飲食の失調・出血・外傷・労倦*などが原因となって起こる。一般的には、肝・脾・腎の三臓の機能失調との関わりが最も密接である。めまいに、目や頭部の脹痛・顔や目が赤いなどの症状を伴うものは、肝陽上亢または肝火上炎の証である場合が多い。食欲低下・納呆*・吐き気・便澇・力が入らないなどの症状を伴うものは、病位が脾にある場合が多い。腰酸膝軟・蟬の鳴き声のような音の耳鳴りを伴うものは、病位が腎である場合が多い。

虚証のめまいには、臨床では、①心脾気血両虚か、②腎精不足によるものが多くみられる。

①心脾気血両虚のめまいは、本篇の症例1のように、目のかすみ・顔色淡白または萎黄*・疲労感・力が入らない・心悸・胸悶・不眠・多夢・自汗・疲労したときに発病または悪化・腹脹・納少・大便稀澇・または排便後に爽快感がない・舌質淡・舌周囲に齒痕・脈沈細で無力などの症状を特徴とする。治療には益気健脾・養心安神を用いる。

②腎精不足のめまいは、めまいの他に、耳鳴り・健忘・精神不振・早く老ける・腰膝酸軟・遺精*・陽痿*・舌体瘦小・脈沈細で尺脈に特にその傾向が強いなどの症候が現れる。治療には補腎填精を用いる。また、腎精不足証は、患者の陰陽のどちらが虚しているかによって、さらに

違いが現れる。(1)腎陽が不足気味であれば、さむけ・四肢の冷え・舌質淡・脈細でやや遅の傾向があり、治療には補腎助陽を用いる。(2)腎陰が不足気味であれば、五心煩熱*・両頬の紅潮・盗汗・舌質紅・脈細でやや数という症候が特徴になる。治療には補腎滋陰を用いる。

虚実夾雑証のめまいとは、ちょうど本篇の症例2のように、肝陽上亢証がそれにあたる。この証は肝腎陰虚から起きる肝陽上亢であり、めまいの他に、頭部の脹痛・目のかすみ・急躁・易怒・顔や目が赤い・心煩・不眠・多夢・少しの労働で腰膝酸軟になる・頭が重く足が軽い・歩くときに足元が浮いているような感覚がある・舌質紅・舌苔薄黄やや少・脈弦細などの症候を特徴とする。治療には平肝潜陽・滋養肝腎を用いる。

実証のめまいには、①肝火上炎証と、②痰濁中阻証のめまいがある。

①肝火上炎証のめまいは、頭部の脹痛・耳鳴り・難聴・急躁・易怒・胸脇部の脹痛・心煩・不眠・多夢・目が赤い・口苦・便乾*・尿黄・舌質紅・舌苔黄膩・脈弦数などの症候を特徴とする。治療には清肝泄火・清利湿熱を用いる。

②痰濁中阻証のめまいは、本篇の症例3であり、めまいの他に、耳鳴り・頭（何かで包まれたような感覚）と身体が重い・胸悶・上腹部のつかえ・悪心・嘔吐・疲労感・力が入らない・眠気が取れない・食欲低下・舌苔白膩・脈濡滑または弦滑などの症候を特徴とする。治療には燥湿祛痰・健脾和胃を用いる。もし、病程が長く脾気を損傷した場合は、虚実夾雑の証となる。

めまいの症状が軽い場合は、適切な治療さえ行えばほとんど予後は良好である。ただし、症状が重い、あるいは発作が繰り返し起こり、長い間完治できないような場合は、根本治療が難しい。特に中年以降の肝陽上亢や肝火上炎から起こるめまいの場合は、陽亢から内風を引き起こしやすく、中風に発展する可能性もある。そうなると、軽度でも後遺症が残り、重度であれば命にも関わってくる。このため、時機を逃さずめまいを予防することは、極めて重要なことであるといえる。

【参考文献】

①『靈枢』海論篇

【原文】「腦為髓之海，其輪上在於其蓋，下在風府。……髓海有余，則輕勁多力，自過其度，髓海不足，則腦轉耳鳴，脛酸眩冒，目無所見，懈怠安臥」

【口語訳】髓は脳に満ちているので、脳を髓海という。その上の腧穴は百会で、下の腧穴は風府である。……髓海で邪気が盛んになれば、むやみに動き回り、挙動に異常がみられるようになる。その動作は敏捷になり、普通ではなし得ないほどになる。髓海が不足すれば、めまいや耳鳴りが起こり、足に力が入らなくなり、目もかすんでくる。このときには、非常に疲れやすく、いつも眠たくなる。

②『河間六書』

【原文】「諸風掉眩，皆屬肝木。風氣甚而頭目眩運者，由風木旺，必是金衰不能制木，而木復生火，風火皆屬陽，陽多為兼化，陽主乎動，兩動相搏，則為旋轉」

【口語訳】諸風によるめまいは、すべて肝木に属する。風気が盛んになり、目や頭が回るものは、風木が旺盛で、金が衰え木を制御できなくなり、木（風）が火を生むものである。風も火も陽に属し、陽の邪気は、他の邪気と重なって人体を侵すことが多く、また陽の性質は動であるため、木（風）と火が互いにぶつかり合うと、目の前がグルグルと回る、という症状が現れるのである。